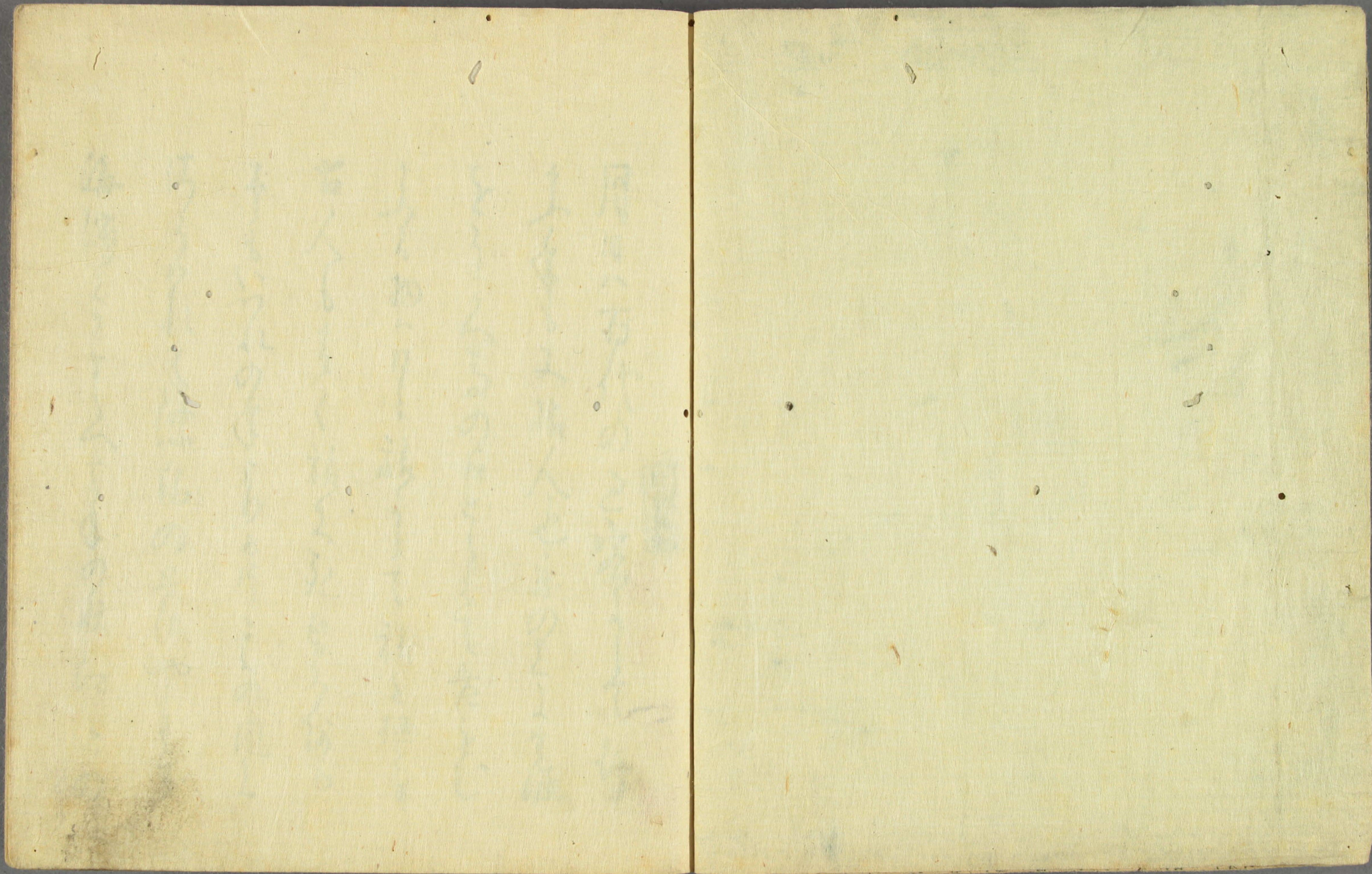


おくのゐる





月日ハ百代のこゝろをくゞり
よもも又旅人也毎のこゝろ
をくゞるの口をくゞりて老とむ
よもあひりて旅を栖とむ
古人も多く旅に死なむなり
予もいつれの世にありてまの風
はくゞりて標榜のこゝろや
海濱のこゝろにまの杖に上の



破心くし 蜘蛛の古葉をさしひいて
やまもさるもまらぬ葉のさき
白川の用こしとさるら神の御し
はさしてささくらにせり紐袂のまの
ささあひて 魚のさしつとまら
引の破をとりさるの結をさしてさ
ささすゆかりにねほの月をさし
ささしてさるささる人ささるささる

別 野上く物さるく

ささるささるもささる代ささるの家
面ハ白をさるのねさるささる
末の七日明のささるささる月ハ
をささるささるささるささる
不二のささるささるささるささる
不の梢又いつとささるささる
まささるささるささるささる

まへに送らぬめとふかしく
とけられぬ途とふかしく
物とふかしくして幻のちかしく
飛ぶの向とくしく

川春やふかしく美の目
をまをまのゆきして行道
すかすか人こひの中
てほけのまゆらまゆら

こと〜元禄ニとせよや奥羽も余
のちゆき只らうめしき
まてしう髪の色を
年しゆきといふ
みせしてひきと定ふ
まけけ其日朝早加
をとりまけけ
まけけおえけ

よとちと伝ふと糸子一糸ハ舞の
流さゆと雨具と筆のきくら
阿ふふふふと伝ふと糸子ハ
とふふふと伝ふと糸子ハ
あふふふふふふふ

室のハ流ふ宿す同行雲と日
神ハ東のむと也昨の神と
留士一狎也無戸室と入て焼のよ

ちとふのみ中ふ火と出見のみと
せれのふとち室のハ流と
将を流るふと伝ふとこの謂也
このと流るとふと室と林と
の昔世と伝ふと

世日月光山の林と流らに
云々
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

尸付申し一五右のそのの梅もあぬて
体とのふとこいふのら仏の獨世空寺
示現——てうら業門のた食喉れ
こもきの人ときすけりふりやと
何——のふすうりよ心とこいめて
みろよ唯せ智すふふ——てふ
是偏國の者也剛毅末調の仁よ
とささくらふも氣稟のは性質を

さあ

卯月朔日御ふく指ねすは首
比取ふと之荒ふと書しとて海
大脚開基の時りえとぬふよふ
歳末よふとけりあやうやと此
清光一天くくや——恩次公荒
しあられは民あはの極極らあ
程候多くて業とけりあ

19
つぎつぎと進みゆくをみるに
あはれみ

正徳とハ、正徳のついでに

白

判捨て正徳らへて
名文なぶん

常良ハは合式してあつて

芭蕉の下等しく斬をうて

薪氷装ふをきくふのふ

ねよ象浮の眺共くえす

収ひ思ハ羈旅の難をりて

旅之曉物多と判て

をくし西五を改めて宗悟とす

仍て正徳らの白を、正徳の二

字力ありてきく

正徳下らをとめて、正徳の

頂より飛流して、正徳の

的と澤よ、正徳の

ひるも入て流の裏よのりはう
らみの籠とト行はけり也

暫時ハ流くおらや夏の物
那頃のころねとらあゝ知人あは
そよりおとあゝしめてあゝと
ゆゑとすゝらゝ一むをえんけ
りよ雨降日さるゝ農まの家
よ一むをえんけとゆゑハ又路中

きりうとよ路中のうわら
ま川あゝよあけとよれハ路ま
といゝとむとさゝらゝ怪さゝら
いゝとむとさゝらゝ怪さゝら
よわなれとらゝくあゝ人あゝ
ふとあゝしゝあやゝはれハは
のゝとらゝ新ゝとらゝとらゝと
しゝあゝとらゝとらゝとらゝと

佐とらしてさしら折ハ小娘と
くまをかきぬとさずうれぬらん
の
やうにうたれん

うほねとハ八き梅子の名あき
さ長

おて人里よむれハあさむと
つりしあをきこをよきぬ

黒羽の館代侍坊ちア一のま
きり信るぞいさぬあさ一の信し

同抄信つりき共才桃あさ

さう朝夕勤とさい自のあさ
もけいして親馬のまうしあね

うし日をあさよさくはさい
し遣送して大進おの信を二尺し

お頃の降るをあさくみ葉のあ
古墳をささくれの八幡宮さ信

与市麻の的を射あさくしてハ

ふぶ氏神ふ八まことらふ
此神社とく竹とやうな草葉に
とまはりふまふらふるれに
宅一ゆん

神験光明寺と云有る
見こり者堂とぬ

夜ふよ足跡をぬむ首途に

高小雲と序さのわくし佛頂和る

ふみ治わり

版立横の五尺よきぬまの

むすやくや一雨ふうのとハ

と松のふ度しと定ふら自竹のと

いつやまふしりし共ねんと雲岸

らま松と雲ハ人てんて共イ

いさふらふら人共くはのり

赤さハさくさくす波移り

ふハアキあるく〜さ〜し〜谷〜
あ〜に板〜〜苔〜〜の〜
月のも今ね〜〜十〜
橋を〜〜し〜入
さ〜の〜〜の〜
ふ〜の〜れ〜石上の小菴 岩
窟〜む〜〜の〜
は〜師の石室とみ〜

木 咏もあ〜や〜な木
と〜あ〜〜を〜
そ〜り殺生石より 鋸休〜
る〜〜送〜ら〜せ〜
ら〜せ〜と〜
ら〜ら〜の〜

隙を横〜
あ〜
ぬ〜へハ過〜の〜

石の一本をよらうとあらんて
蝶のまじりたる花のこのまじり
うさぎのりみきりみほらうさぎの
柳ハサキ野の里とありて田の畔
しあらしの那守戸部某の
は柳みとらやとあくよのまじ
けしのかといつこのまじり
しをいふは柳のしりり
まじりぢくれ

田一抔抱して去る柳くれ
心許るまじり日くまじり
の同しとて抱くまじり
都一と便ぬしとみし中も
此用ハと園の一とて風標の人
心をとむし秋風を身とあし
お葉を付くしとまじり

たゞ此也卯の糸の白がよき
糸のまろしきて雪もよるるし
比うする古人冠を正し— 衣裳と
改し— 清の筆も— さら
あわ— さら

卯の糸をかたし— 開の時
とく— てゆり— さら— さら—
川を流るたり— 津根さく右

よら右城、相馬三春の在り
の地をさうい— ころけ
まをり— 今ハ— 是て地
新う— する川力釋— 等窮
と— 糸のまろしき— 雪もよるる
先右けの園い— ころけ
開も途のく— みる心つ— ね具
風系— 統うり— 遠— ねを

新...
~~~~~

風流の初ややくの田植

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

世の人乃んはぬふや軒の衆

等窮く宝を乞へし五里年柱皮

の宿と維きてあさくふと路より

~~~~~

~~~~~

ふりつゝまはまゝと人々よらぬ
さしとる人々のはまゝの人々
さしとる人々のはまゝの人々
さしとる人々のはまゝの人々
さしとる人々のはまゝの人々

福好よさやあくれハさうすから
の石をとらうとさうのはらう
さしとる人々のはまゝの人々
さしとる人々のはまゝの人々

何り聖の童アのまゝにしやぬら
昔ハそれの上の作しをばまの人の
まゝをあらうとせんとて誠を
よみては谷よつきはせハ石の
面トさすよとてさすよとて
さすよとて

甲苗とらうとてさすよとて
月の光のさすよとてさすよとて

とあるし、山に佐藤左司の四代と
たのく、徳一とある、山に佐藤左司の四代と
弱那とある、山に佐藤左司の四代と
く、山に佐藤左司の四代と
よ、大子の山に佐藤左司の四代と
て、山に佐藤左司の四代と
つ、山に佐藤左司の四代と
塚よとある、山に佐藤左司の四代と

く、山に佐藤左司の四代と
く、山に佐藤左司の四代と
と、山に佐藤左司の四代と
と、山に佐藤左司の四代と
と、山に佐藤左司の四代と
と、山に佐藤左司の四代と
と、山に佐藤左司の四代と
と、山に佐藤左司の四代と

五月、山に佐藤左司の四代と
五月、山に佐藤左司の四代と

五月、山に佐藤左司の四代と
五月、山に佐藤左司の四代と
五月、山に佐藤左司の四代と
五月、山に佐藤左司の四代と

美濃の郡より入道に於ておぼし
の塚はいつくのちかきと人ま
とまありあこたうしこちからほ
の里をこのちかきとておぼし
の社とてこのちかきとておぼし
此の五月より入道に於て
あつれはちかきとておぼし
とておぼしとておぼしとておぼし
のおぼしとておぼしとておぼし

美濃の郡より入道に於ておぼし
の塚はいつくのちかきと人ま
とまありあこたうしこちからほ
の里をこのちかきとておぼし
の社とてこのちかきとておぼし
此の五月より入道に於て
あつれはちかきとておぼし
とておぼしとておぼしとておぼし
のおぼしとておぼしとておぼし

美濃の郡より入道に於ておぼし
の塚はいつくのちかきと人ま
とまありあこたうしこちからほ
の里をこのちかきとておぼし
の社とてこのちかきとておぼし
此の五月より入道に於て
あつれはちかきとておぼし
とておぼしとておぼしとておぼし
のおぼしとておぼしとておぼし

の橋杭よりきしれききるけり
きはしや杭ハけしむはれしむ
海島の汀にあらハ体あるはハ橋
継ぎとせしや今将子嶺
のしらとさのちらとけり
杭のしとるしら

武隈の杭女とてさう橋杭
とてしらの橋女とてさう杭ハ

橋より杭ハとて三月月謝
えん川を伝ては橋より入あや
ゆくりと結右をとりとめては
匠のあつたまゝとて
匠の師心あら者とはして
しらのこの本有まはれしむ
匠とてしらの考よむれしむ
一日案代けり宮城、野の女は

あつて秋のききこひさうぢり
玉田よとぞ一つ一つ園ハはらそひ
きくち也日暮しりぬねの暮り
入て家をを本のトとてさうさう
うく家あけきハよれさうさう
とつさくとハよみしれ茶師を天神
のいぬるとおけしきるハとれぬれ
社修治つよのてり盡うかこひ
思得のほぬつけよ草鞋豆
あつてよんハよ風流のきき
うきよもりて其の美をたけし

あつてサシよぬん茶の種のは
この畫圖よよとてきこりりハ
あつてあつたのら際よ十首の
茶を今もよくとするの茶あ
と個し園をよと献すよらあ

臺碑 市川村多賀城下有

つゝの石ありハ高サ六尺餘横之尺廿
九寸口と穿りて文字悉也四維國
界之教里と云ふ此城神龜元
年按察使鎮守府將軍大野朝臣
東人之所里也天平宝字六年參
議東海東山節度使同將軍
憲養朝臣猶修造而十二月朔日

と有聖武皇帝の由河よき者の
むしりりみむらりの枕みりく
流傳ふといつとも山明川流て取
りくたさう石ハ切てささくふ
本ハ古てささくくうけし時傳り
代さきくく、ささくくくく、
のこをささくくくうて疑ふささく
い歳の記念今罷あし主人の心

を園すりぬの一徳ある余の
収し精旅の芳をあらわし
個とあるとあり也

これより野田の玉川仲のふとるぬ
末乃松とハハと遠く末松と
松のあらく皆蒙りくくをぬを
うり一松とつてある松の末とぬ
ハハのここととありとぬ

垣うさの浦よ入おのうぬとけり育
ぬのをゆゆれて夕月とぬ
松のゆゆとぬとぬとぬとぬと
きつてきつてきつてきつて
てうりてとぬとぬとぬとぬと
いぬとぬとぬとぬとぬとぬと
松とぬとぬとぬとぬとぬとぬと
ぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬと

もあしひみじきら細より
とて枕らうしうしうと
うふきよとの遺風とれよの
しめ給くさうらるる期はさ
のり神し信國守再興とれ
て宮後やしし杉椽とらや
うし石の階お奴しきり初日あ
若のむらとらうしやうしうたの

果茶土の坊とて神靈あしよ
ましとらふさふの風俗とらと
いし貴くれ神はうちとてまはさ
いぬの戸らうの向し又次とて和泉
三つや奇進とて五つとてその位
今月の常とてうらとてうらと
あし一渠ハ勇義忠孝の士也佳命
今よむのてとらうしうらと

城人の道と舟とをさく
ふとさくことよとさくことり目就
午よらう〜船とりて不修く〜
其間一里餘碓修の修〜

柿と舟の〜松修ハ枝葉不
一のぬれ〜凡河江西湖を修
東南の海と入〜江の中〜
湘江の湖とさく〜の修と

〜〜歌のハ天と指ぬすりの
〜よ甫匍修ハ二さよ〜
三重よ〜たよわれ右よつ
〜肩〜あり抱るあり足縁也
〜松の修〜や〜松葉
〜屈曲をの〜
〜〜其〜〜實然
〜美人の顔を粧〜

神のむし〜大とすまのふもるわと
うや造化の天工いつまの人々筆
をふりしむ 詞とてまさとさ

雄詩の破ハ地つてまて海もまら
流也 平らぬ 禪師のふ実のた
ま 流石る〜る 将ねのふ 流る
世といふ人〜も 縁く〜る 流る
流る 流る 流る 流る 流る 流る

菴園の住み〜い〜る人〜と
ま〜る 流る〜る 流る〜る 流る〜る
ふ〜る 月海〜る 流る〜る 流る〜る
又あ〜る 流る〜る 流る〜る 流る〜る
流る〜る 流る〜る 流る〜る 流る〜る
風雲の中〜る 流る〜る 流る〜る 流る〜る
あ〜る 流る〜る 流る〜る 流る〜る

ね 流る 流る 流る 流る 流る 流る
流る 流る 流る 流る 流る 流る
流る 流る 流る 流る 流る 流る

予ハ口を閉じて眠しとてしりぬ
らむこと一回房をとりてし時暮
松の待りたるふ安適松のう
さきの心すを強ふる徳をい
こしひのふさしと見杉風過より
そまらあり

十一日瑞岩さまの旨書さるに十
世の昔さる僧の年四十年ありて

入る御綱の及用とすこと
雲み禅師の法化し依て七堂
夢はりて金壁に莊嚴を
仏土成就の大伽監とハうれ
彼見仏聖のさへいつくさ
十一日平和泉とんりねるの
松の心すを強ふる徳をい
一雉老葛菫のほよみ

とむらうす終し路少きまじし
石の巻といふ漆よかこゝぬあは
とよみこなるら金花と海と
見やう一數百の廻入にまつと
ひ人灰地をいへうて電の
煙をうらまらふといふやうぢ
およしものまらふとあはんとすれ
とより右のう人まじし海と

小室よ一おをいへうて
ふとあはれまらふとあはれ
尾ゆらりの牧まの草むらうと
めとまらふとあはれまらふと
まも治まらうて戸伊とあ
一室して平泉とあはれ其間
余里らうとあはれ

三代の業耀一膽の中

大門の江ハ一里ハありて有る
う江ハ四節ノ處ニ金鶴ノあり
形をみよう先ニ館ノあり
水ト川南部ニあり流レテ大河也
衣川ハ和泉ノ城ニありて館
の下トシテ大河ニ流入康衡ホリ
江沿ハ衣ノ川ニ流レテ南部ノ口
を以テ堅メ夷を拒ムルニあり

備シ義臣ヲ以テ此城ノ
こりり功名一時の最トスルニ因破
きて山河あり城春ノて草
まみよありと笠ヲあてて町の
つとて川と名ニ付ル

衣ノ川

和泉ノ衣ノ川

道ニ再入ル

す徑堂ハ三將の像とのく
光堂ハ之代の権を納りとのの
佛と安置す七宝をうもしく
珠の扉風よやまき金の櫃、最
雪し朽て既頽廢て虚の最
とぬくきをを四面新し圍て葉
を覆て風るを後哲何千歳
の延念といふなり。

五月旬の終のくくや光堂
南ア道なきくくやわてきくくの
里く伝らふくくくくくくくく
まてまらまのくくく尿前の開
くくくくくくくくくくくく
七路諸人傳るるくくくくく
開くくくくくくくくくくく
開くくくくくくくくくくく

日鏡の言々水と封人の水を見
うけを金も水も三日月ぬれ
てうらみさう中へ送るぬす

蚤虱の尿まを花と
河のえもより出羽のあ
大らとほてりさうのらさ
れはなまの人もおとさ
さうしきりさうとて人を

おれれは高き水の者及根指
をよこし櫻の花を携てさ
せんよこしりさうぬあや
さうさうもあさき日ぬれ
辛きいづいをさうてほよつて
おれれれれれれれれれれれ
森とさうて一鳥さうさうの
下園さうあさきさうさう

雪の初踏ふく氷をわたり
よ藤し肌よつめさし行を流
しと家上の庄くおひまの
葉内とくみのとせうせみら
か不問のうきさきさうをくあ
まらさし仕合とさうとさうて
これぬ話よすてく物とくく

乃こ也

尾不澤しとく信風とる者をとる
わさきハさうらのまれとくさうや
さうす都しおくさうてさ
すくよ藤の情も知れハ口は
とめくも途のらとらさうて
かしらさう

雪の初踏ふく氷をわたり

遠出よふわゝ下のひまのき

すゆるまを待よししあ移のふ

稽仰する人ハ古仕のすま_{い言長}

少形傾くくま石らよまらまよわ

慈覺大師の同基くして跡

閑方地也一見すつこくし人

のまじらよ係く見是はら

とゆてはく其同七筆もり也

イノ

日ひまくまをく林の坊よ宿あり

あし山との堂よのらら岩

と殿と重てふくく杉栢車回

土石たて昔備よ岩との流

扉を用ておのまらまをす

まをくちまを遠くは園を

佳景よ敷実くし心り

閑るやまらよとみ入障の

家上川のほとと大石田とて
日初を行なふと古きと
離階の終
うちれてとれぬあまのむら
ひは片角つあうのつとやり
ちや
そらよららあーて新たゆ
はくあまのうらとみら
ちるへまら人ーまけれと
あま一まあふこのまの風流
はましむら

家上川ハみらのくら出てとれ
を水とすとこをあまのうら
あうらとて離あを枝敷とみ
と流て果ハ酒田の海へ入た
霞ひあその中へ船を下す
よゆつとていふとやいな
白糸の流ハ昔葉の流く

仁人を岸より修てまゝ
きつてみあや

五月廿五日つめて早一
ら上川

六月三日羽黒山より
とと者をもとめて別
羽黒山よりむら園司
た吉

因利一留す南谷のふ
後一

今一は憐愍の情に
あ

は日本坊をわし誦
諧具り

有難や雪とく
南谷

五日権現よ消當山
同瀧能除

大師はいつまの代
の人とて

こゝろ延喜式より羽
列里山の神

社と有書寫黒の字と
里山と

まゝとや羽列黒山と
申

て羽黒とともや出
羽

鳥の毛羽と此國の貢物と轍と
風土記より作るやん月山湯殿
と合て三山とて當寺武江東
叡ノ届し天台止觀の月明
くくく因茲融通の法の灯け
くくく僧坊棟とくく修験
行法と禪し天山靈地の縁
知人貴且つ繁榮長く

くくく山と謂ひし
八日月山のりら本郷をあり
し引りけ實符し取をもし強力
とくくあしりひいにて雲霧と
きの中し氷雪と踏くのりら
市八里ふりし日月行及の雲園
よ入しとらやしれ息けりし
頂上し踏れり日没て日影ら

毎と補心修をと枕として臥て
心々を多口をてし世は清きこと
得るはしと

谷の清く銀流小谷と云ふと此山の
源は雲氷と撰く云々一潔く何
しと釵と打所月山と銘を切
て世に賞をくむ彼龍泉と釵
を評と云々干将莫邪のしるし

そよ道よ垢社の紙あささく
本をこれきりきりし種をくまて
たりしやまぬきとこと人きりきり
梅のつらとまはらひとやるありあり
秋をのりしけし春をこころに
よきよきのよきよきよきよき
梅よきよきよきよきよきよき
傍正のそよのそよよきよきよき

作さうしてさういふあつて七の中
の
ぬおひ者の法本として他
事とを扱ふ事仍して善くともいへる事
坊よりゆれんが園園の書より信
こと順礼の句に経書とす

浄土のやらのまのゆきと
雲のまきまのまのゆきと
信くまぬはゆきとぬきと信ま

ひまるとゆきとゆきの間

羽黒とて鶴の園の城下と
氏重行とて村のぬきとゆきと
うれと誹言一とゆきとたきとゆきと
さうりぬ川ぬきとゆきとゆきの漆
まゆきと誹言石玉とと鶴の園の信
まゆきとゆきと

はゆきとゆきとゆきとゆきと

暑き日は海へくさくさの上川
江山の陸の風を吹くをわくわくして
今蒙るは一方下を貴海内の旅
より東北のふるさとを眺むを借し
いさこころをわくわく其際十里日影
やかくくは波風を吹くを吹く
雨朦朧とくくく海の上くくく
園中くく黄化くく雨くく奇せ

まは雨後の晴色くく母まくく
の空をくく膝をくくくく
を吹くく天を舞くく舞を
やうくく歩を舞くく舞を
くくく先能周くくくく
くくく幽みの終をくくく
岸くくくくくくくく
くくくく梅のたぐくく

の行人をよめて、江上より内陸
のり神功后宮の御墓とて
を干満保るといふ、よち幸
あり、中より、ゆすい、
中よ、や、寺の、よ、
を、と、携へ、風、一、眼、の、
ありて、南、海、天、を、
其、陰、を、江、の、西、に、

の、開、洛、を、東、に、
舟、田、を、海、北、に、
え、て、信、を、と、
え、江、の、縦、横、一、里、を、
と、又、異、なり、
如、く、象、深、に、
は、み、と、地、勢、
を、や、

象浮や雨くぬ絶縁のふ

改神や勢はさかむし海原

みふれ

象浮や料理にくふ神樂

ちんげ

正實のふや戸移とまかしくメ 涼

このふの商人世耳

岩上と雌鳩の言あそむら

彼いぬ契ありやみさこの雲

せうら

酒田の余は日々と重て北陸の

重よらと遠くのかりい物と

やうめくし加賀の府やうて百世里

と竹嵐の園とくゆまこと秋は

の地とまうりをひきて熟中一の

ふ一袋のの開と到らほる九日

暑温の芳と神とまのやう

みみくのてちをまらるる

ふ月やちかしの夢のあはれに響

荒海や佐後よとちよふ天の

今日ハ親しうみとくす大しり

結のしるしと北國一の羅石と

結してつれ移れと栞引よと

ア様しるしと一回帰て西のさし

みささのあつこ入斗とこさし

手老しとみのこのみもいと文こ

お落しととよけハ結ほの玉新

ぼとちのむ女房一伴路かきま

すくしとて園とてそののさし

あすハ左つしとくすしとて

さくさくしとて他とてさやも白伝

のよきまけしとがとち命し

あすのこの世とあさしとちり

あすのこの世とあさしとちり

うゝつゝあゝとあゝとさく
る疾人てあゝと揺るゝとあゝと
むゝとさくり葉さゝめ旅路の
うゝとあゝりええまゝのうゝと
ゆれとさくさくうれもさくさく
ひゆん衣の上のり情ゝ大慈の
めとさくさくれてあゝ家ぢかゝあゝの
とあゝとさくさくあゝあゝのさゝと

ゆれとさくさくさくハアとさくさく
あゝとさくさくさく人のりゝとさくさく
あゝとさくさく神功の加護とさくさく
あゝとさくさくさく捨てあつ
あゝとさくさくさく

一 家よお女よあゝとさくさく月
あゝとさくさくさくさくさくさく
くろくさくさくさくさくさくさく

れ川をわたりて那古とて浦上
土撥籠の者信に春をうけしむ
知姑の言と知こりの言と
人よちれとそより五里い
はひてむよのら信しよ
聖のせん如くうすうる水えせ
の一夜の者くまりのあも
いんをとたれそこの國へ入

こせの香や

入右もる如
平のあくらりうら谷をい
今頃ハ七月申の五カし
大塚よりよ商人に處へ者
そこ山う路者をもと
一袋とこかのハは
ふのくせしとせよ
しそこのか

具見道方を信す

塚と知れぬはあはれ

あつたあつた

秋涼くも毎しむけわん

途中 喰

うくと目ハ難句もあまの丸

少形とくあ

とちりーきふあや小ね

はふ太田の神一社

甲綿の切あり

属と一可義朝

とうやうし平士の力

月庇より吹ぬ

まのりりの金をとら

うぬ形ちしりさ

まふ美仲ちしり

しこめしれはくし極元の山
うはとーヤー九まのあまの
縁紀すーみしり

むしおな甲の下るきりく
山中の湯水くしりくは根
う懸けりーみるしーはひも
危のらほし観音堂ありふ
山のほろし十とふのりれ

とちりさとのみてはほ大急大急
の像と安んずーかみて那谷
とくろのしーや那智谷の
こ字をあらうしりーしりま
石ささくし古松揺るくく
草らあまの小学堂まのしり
まらしーしみるのちれく
石山乃石よりしりー秋の風

僅泉一落す其切有可なり
云

山中やるるのききしめはるの白

いさくも童くく水く又誦諸を

好そ洛の貞室より宵のひり

なましきりーに風飛しき得

みくれて終るゆて貞室のひん

ごみりてせしきくは秋の

及び一判付の料を信て

く今又しー候くはうりぬ

普良ハ腹を痛て作務の

困も終るといふふりありあれ

先きてしー

りくてもふれ休とて姑の家

とちりあかりのきし

とちりあかりのきし

然りのしきり隻鳥のかわら
きよきよきよきよきよきよ

今日よのやまけはくさるる

大聖おの城お全昌寺より

きよきよきよきよきよきよ

きよきよきよきよきよきよ

秋風すやきよきよ

とよきよきよきよきよきよ

きよきよきよきよきよきよ

外も明りのきよきよきよ

きよきよきよきよきよきよ

食堂より入るハ城おの国

きよきよきよきよきよきよ

下もきよきよきよきよきよ

きよきよきよきよきよきよ

おきよきよきよきよきよ

塵掃てあつやちしつた所
より阿くぬさきししてさう鞋ふ
うしや於左知ふの信を結
の入にをさしし掃しとけ
羽のねをさしし

おそりやれしはつとささで
月をきれしはつとささで

此一首くし物さあさより

一辨を初るりの六を現し掃ふ
まきくくし

丸田天龍寺のもた者ちきと周
うきくくし又金次のおね
とらありのうきくくしとらあ
けささくきさしとらあ
風まおささくしとらあ
おそいあされらとらあ

つゆ今統ありしとて

おきく御引はく余は成

五十二うへ入て永平とて

了道之移師の忠孝や邦様

ふ里を避てうへう信

治をのりゆかの貴を

者とうや

福井ハ三里行あふん

そしめて出るし

諸とく一

たき、隠士とい

てし

十とを

てし

る

う

引かてあやしのやましくたは
今さらのこころしめて影に
ましよにちをうくすま
はらうしとふし門をたむけ
らうまら女のましくつよ
かたのよるのちたふあ
はあしのにりしとあ
あうー月あしとあ
うれまのあうーしとあ
むしあうーしとあ
はらうしとあ
えのあうーしとあ
名月につまのあうーしと
きんしとあうーしと
銀しとあうーしと
おしとあうーしと

うらして比那らるるあつら
あまむつの橋をわたりしあは
の世にハ物〜一あ〜らるる
の用をとこしてほむはらと
あつらと極う城うららあは
しあつらとやくしナ字のま
あれつらうの清〜一宮と
り〜むらの夜月ほら〜ら

あまのあし〜う〜あ〜らるる
とらつそ遊路のあまら明長
の経緯〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
う帰す〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
うあ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
廟也社頭神とら〜ら〜ら
の洞〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
の白砂霜をま〜ら〜ら〜ら〜ら

往昔おりの二世の上人大系
教起のよりなりてしつゝ
を刈土石をとりぬ泥濘を
うらうそり糸信はまのれ
うし古例今よきし神意
しから初をとりぬれを
おりの砂おとすなりと亭の
のりりり

月清し遊りのかたけり
上
ナみの亭さの白しやうとす

西暦

名月や水園日か定くあり

ナ六のさき界しぬるやまはの
小貝のりりと種のはしき
ますし海上七里あり天庵に某
とそりの破鏡水竹のるる

て如行、家へ入集るる事
川子刑口又子其外を
き人へ日相とさして候
世ののりあつて且
悦ひ思ひする旅の相
をうやうやとさるる事
ホロホロのれと伊勢の辻宮
おとよびのあまのめ

吟の
あまのめ
うたれり

かろひくも 龍身も かくまへんも かくまへんも
まけなるも かくまへんも かくまへんも かくまへんも
だらても かくまへんも かくまへんも かくまへんも
まきまき かくまへんも かくまへんも かくまへんも
かくまへんも かくまへんも かくまへんも かくまへんも
かくまへんも かくまへんも かくまへんも かくまへんも
かくまへんも かくまへんも かくまへんも かくまへんも
かくまへんも かくまへんも かくまへんも かくまへんも

重々々々々

元禄七年 初夏

吉徳七

此書と古河を蕉翁の紀行として吉徳
清書と書の長みすむかしく守七の紙の重
み十二の初終の白紙あり初成の表紙は書
以くやう外題も令の書研とくくくくく
とつとつ真乃知たる吉徳月院を内り

あくくしてりきくくくくくくくくくく
書無月予り方に偶居よりくくくくくく
めりくくくくくくくくくくくくくくく
同一年の祇無月院波のあくくくくく
かせちやきくくくくくくくくくくく
留りりりりりりりりりりりりりりり
顔くくくくくくくくくくくくくくく
是下は落りたる不思後くくくくくくく

あゝい言——と見えて中絶せぬおどろく——

まら兄の驚かして古くもあ——い言あ——

い言い言おどろい言い言い言い言い言い言い言

あゝい言——い言い言——い言い言い言い言——

い言い言い言い言い言い言い言い言い言い言

あゝい言——と見えて連化の後見の怪あ——

い言い言い言い言い言い言い言い言い言い言

あゝい言——い言い言い言い言い言い言い言

あゝい言 Same 連化の怪あゝい言い言い言——

あゝい言い言い言い言い言い言い言い言い言

あゝい言い言い言い言い言い言い言い言い言

あゝい言い言い言い言い言い言い言い言い言

あゝい言い言い言い言い言い言い言い言い言

あゝい言い言い言い言い言い言い言い言い言

あゝい言い言い言い言い言い言い言い言い言

あゝい言い言い言い言い言い言い言い言い言

三
流つ予の楳や流りて袖の裏

元禄八乙亥年九月十日

於溪峨落柿を書写号

山人
吉本相

井筒屋のあふ傳りし一勇此幼き松竹

のまきよき松、後竹、今異えとあは

とくくそのまのゆのしんりんりん

吉本の冬何賀のふ程を、柳宿のあは

古き五古の中よ此幼きゆ原中歌如

とくり見よよま松松松後吉本松傳名乃

因松をさくくおあり見よまむらしん

しんあしんりては書の真ふく

明和七年十月翁忌日 湖南義仲寺の

願のこく

縁長吉

奥細道拾遺 全一冊出來

奥細道菅菰抄 全二冊出來

同附錄 全一冊出來

寬政元年酉仲秋再板

諧仙堂 藏板

洛陽舊門書林

井筒屋彦書房
攝屋治全房
浦井德右衛門



